

主 題：キリストの福音を生きる教会②

聖書箇所：コロサイ人への手紙 1章4、8節

テーマ：“神様に喜ばれる教会”とは一体どのような姿をしているのか？

タイトルにもあるように、私たちは先週からキリストの福音を生きる教会について、コロサイ人への手紙1章から学び始めました。今回はその続きを一緒に見ていきたいと思います。

内容に入る前に、まずみことばをお読みします。きょうは特に4節の後半部分を中心に考えたいと思いますけれども、全体の流れを覚えるために1－8節をお読みします。

コロサイ1：1－8

「1 神のみこころによる、キリスト・イエスの使徒パウロ、および兄弟テモテから、2 コロサイにいる聖徒たちで、キリストにある忠実な兄弟たちへ。どうか、私たちの父なる神から、恵みと平安があなたがたの上にありますように。3 私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。4 それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛のことを聞いたからです。5 それらは、あなたがたのために天にたくわえられてある望みに基づくものです。あなたがたは、すでにこの望みのことを、福音の真理のことばの中で聞きました。6 この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。7 これはあなたがたが私たちと同じしもべである愛するエパfrasから学んだとおりのものです。彼は私たちに代わって仕えている忠実な、キリストの仕え人であって、8 私たちに、御霊によるあなたがたの愛を知らせてくれました。」

○神様に喜ばれる教会に見られる三つの特徴 4－8節

さて、きょうの内容を見ていく前に、これまでに学んできた背景を改めて思い返してみてください。私たちが今学んでいるこのコロサイ人への手紙は、コロサイという町にあった教会の兄弟姉妹たちに宛ててパウロが書き記したものでした。パウロはこの教会の人々に実際に会ったことは恐らくありませんでした。というのも、この教会を建て上げたのは彼ではなくて、彼の働きを通して救われたエパfrasという人物によってでした。だからパウロは、この町の兄弟姉妹たちのことを直接は知らなかったのです。しかし、そんな彼のもとに、ある時、エパfrasが助けを求めてやって来ました。エパfrasは非常に大きな問題を抱えていました。それは彼が仕えていたコロサイの教会の中に、にせ教師たちが入り込んで、いろいろな嘘や偽りが広まるようになっていたのです。正しい福音をねじ曲げるような教えが教会の中でなされていて、キリストを否定して、キリストだけでは不十分なのだという誤った教えが人々の間でなされたがゆえに、混乱が生じていました。人々は何が正しくて、何が間違っているのかわからなくなっていました。パウロは、そんな現状をエパfrasから聞かされました。会ったことはなかったけれども、同じ主を愛する兄弟姉妹たちが苦しんでいることを知らされたのです。当然、パウロはその状況を放っておこうとはしませんでした。愛にあふれる彼は、そんな苦しむ彼らを何とか励まそうと、この手紙を記したのです。キリストだけでは十分ではないという教えに混乱している兄弟姉妹たちに対して、いま一度この手紙を通して教えようとしたのです。「皆さん、大丈夫です。イエス・キリストこそすべてにまさって偉大なお方、私たちの救いにおいても、私たちの日々の歩みにおいても、この方だけでいつも十分なのです。だからほかのものに心を奪われるのではなくて、どんな時もこの方であって歩んで行きなさい」と。それがこの手紙のテーマでもありました。

パウロから手紙を受け取ったコロサイの兄弟姉妹たちは、どんなにこの手紙によって励まされたでしょう。彼のことばを読んで、彼らはどれほど勇気づけられたでしょう。私たちがそんな手紙を読み進め

ていく上で、興味深いことがありました。それは、この手紙を記すに当たって、パウロは、あいさつをした後で、いきなり教会が抱えている問題について触れることはしていなかったということです。確かにいろいろな問題が教会の中に起こっていることは、エパfrasから知らされていました。それらの問題が決してどうでもいような簡単なものでないことももちろん知っていました。もっと言えば、すべての土台となるイエス・キリストに関する教えが揺るがされていたのです。それらの問題について、パウロはいきなり触れることもできました。でも、彼はそうしなかったのです。パウロが最初に語っていたことは、神様に対する感謝でした。エパfrasからコロサイの兄弟姉妹の様子を知らされたパウロは、あいさつを述べた後で、まず彼らのことで神様に感謝をしていたのです。パウロにとって、この教会は一度も訪れたことのない教会でした。しかし、エパfrasからの報告を耳にただけのその教会の姿は、パウロの心に大きな喜びをもたらしていました。彼らの様子を直接見たわけではなかったけれども、神様に喜ばれる教会として、彼らが歩んでいたことが余りにも明白であったからこそ、パウロは彼らのことを覚えて感謝をしていたのです。コロサイの人たちというのは、間違いなく真に救われていた人たちでした。もちろん罪や問題がいっさいなかったわけではありません。

しかし、彼らのうちには、本当に救われている者に見られる特徴を見出すことができました。ではパウロはいったいどんな特徴をコロサイの兄弟姉妹のうちに見出したのでしょうか？パウロは神様に感謝を捧げた、神様に喜ばれる教会の特徴として、どんなものを見出していたのでしょうか？そして何よりそんな特徴は果たして私たちひとりひとりのうちにも見出すことができるのでしょうか？そのことを3-8節を通して、先週から考え始めたのです。

1. キリスト・イエスに対する信仰 4 a 節

そして、私たちは、この部分に見られる神様に喜ばれる教会の特徴、大きく三つあるうちの最初の一つを前回見ました。それがキリスト・イエスに対する信仰でした。コロサイの教会にはキリスト・イエスに対する信仰というものがはっきりと見て取ることができたのです。4節の初めに「それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰」と書いていました。それをパウロは聞いたのです。コロサイの兄弟姉妹は、エパfrasを通して自分たちに伝えられた福音を心から信じた者たちでした。神様の恵みによって、救いの真理が示されたとき、彼らはそれをただの知識として認めただけではなくて、それを自分のこととして信じた者たちでした。自分の罪を悔い改めて、イエス様を救い主、主として受け入れた人物たちでした。そして本来滅ぼされるべき自分たちを、罪から救い出してくださったその方を心から愛して、すべてを捨てて従っていこうと歩んでいた人たちでした。コロサイの信仰者たちは、イエス・キリストを信じる信仰によって救われて、イエス・キリストを愛する群れとして、この方にあって忠実に生き続けていたのです。そんな姿が余りにも明白であったからこそ、パウロは彼らのその様子を耳にして、彼らの姿を思って神様に感謝を捧げたのです。

2. すべての聖徒に対する愛 4 b、8 節

振り返るのはここまでにして、きょうの内容を実際に見ていきましょう。4節の後半部分に、私たちは二つ目の特徴を見て取ることができます。「それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱えている愛のことを聞いたからです。」と書いてありました。パウロが見出した神様に喜ばれる教会の二つ目の特徴は、すべての聖徒に対する愛でした。もちろんコロサイの教会に関して、ほかにもいろいろなすばらしい点を挙げることはできたでしょう。でも彼らは何よりもすべての聖徒に対する愛によって知られている群れだったのです。コロサイの兄弟姉妹たちというのは自分たちの主を心から愛していただけではありませんでした。彼らはお互いのことを心から愛していたのです。もっと言うのであれば、彼らが持っていたキリストに対する真の信仰は、彼らのうちにほかの人に対する真の愛を生み出していたということです。彼らが持っていた生きる信仰は、彼らのうちに働いて、ほかの兄弟姉妹に対する生きた愛を生み出していました。

さて、ここでよく考えてみてください。私たちは、みことばが繰り返し「互いに愛し合う」ということが欠かせないものであると教えていることをよく知っていると思います。それが本当に救われている者の歩みのうちに必ず現れる態度なのだということも、これまでに何度も耳にしてきたことでしょう。でも、果たして私たちは、本当に自分のこととしてそのみことばを信じているのでしょうか？例えばヨハネは、このようにはっきりと口にしていました。Ⅰヨハネ3：10、14に「:10 そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行わない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。……:14 私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。」と書いてあります。また、同じⅠヨハネ4：20-21にも「:20 神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。:21 神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。」と書いてありました。また、愛する主であるイエス様もこのように言われていました。ヨハネ13：34-35で「:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」と。

さて、これら幾つかの箇所ですべて何を教えられていたのでしょうか？ヨハネやイエス様が言わんとしていたことはある種明白でした。それは、本当に救われている者であるならば、その人はおのずとほかの兄弟姉妹を愛するようになるということです。本当に救われているのであれば、本当に信仰を持っているのであれば、その人はおのずとほかの兄弟姉妹を愛するようになるということです。キリストを愛する弟子として、本当に歩んでいるのであれば、その人たちは必然的に互いのことをも愛し合うということです。神様に対する私たちの愛と、互いに対する私たちの愛は切り離すことが絶対にできないとすることができます。言いかえると、私は神様を心から愛しています、この方に喜んで自分を捧げて、この方の喜ばれることを熱心に求めて生きていきたいと願っていますと口にしていながら、いや、私は兄弟姉妹との間では愛を実践したいとは思いません、そんなことを口にするのは絶対にできないということです。また逆も同じです。私は兄弟姉妹のことを心から愛しています、兄弟姉妹のために喜んで犠牲を払って仕えて、その者たちの益になることを熱心に求めてやっていきたいのですと口にしていながら、私は神様のことは全然愛していません、私は祈ることもしたくないし、みことばを読むこともしたくないし、神様を愛することもしたくありませんと、そんなことも絶対に言えないということです。神様に対する私たちの愛というものと、互いに対する私たちの愛というものは、決して切り離すことはできないとみことばは教えてくれているのです。

だからこそ、私たちにとってこれは大切なことになります。たとえ自分は救われていると口にしていたとしても、もし私たちが頑なに愛を示すことを拒み続けているのであれば、その信仰は本物ではない、偽りだということです。イエス様は「もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」と言われました。コロサイの教会の人たちは、まさにそのように歩んでいた者たちでした。彼らは主を愛して、すべての聖徒たちを愛していました。だからこそ、そんな彼らの歩みを耳にしたパウロは大いに喜んでいたのでした。彼らが本当にキリストの弟子として歩んでいることを確信して、神様に感謝をささげていました。彼らは本当に生きた信仰を持っていたからこそ、それが本当に互いを愛するという証をもって明らかにされていたのです。彼らはキリストの本物の弟子たちでした。

では、果たして私たち自身はどうでしょう？私たちはほかの人たちから愛する者として知られている信仰者として今を歩んでいるのでしょうか？私たちは神様に対する愛と互いの間での愛、どちらにおいてもキリストの弟子にふさわしいものとして、その特徴をもって愛を実践しているのでしょうか？私自身、

今回のメッセージを準備しているときに、非常に大きなチャレンジを受けました。一週間を振り返ってみて、果たして自分はすべての相手に対して、どんな状況にあっても、ことばや態度や考えにおいて、いつも愛を実践していたかと問いかけてみれば、できていない自分を数多く見出しました。自分の弱さや自分の愚かさもしっかりと見えて、心が重くもなりました。悲しくもなりました。恐らく皆さんも同じかと思えます。私たちはみな愛において足りない部分がたくさんあります。難しさを覚えることもあります。でも成長していきたいという願いも持っています。成長していかなければならない部分もたくさんあります。だからこそ、残りの時間を使っていま一度私たちの目指すべきその愛について考えてみましょう。コロサイの教会が実践していたその愛の姿から、そもそも愛というのはいったいどのようなものなのかを改めて考えてみましょう。

●コロサイの教会に見られた愛：二つの要素

私たちは特に彼らのうちに、愛に関して大きく二つの要素を見て取ることができます。そのことをともに学んで、確かに今、愛において欠けているところはたくさんあるけれども、キリストに似た者としてひとりひとり、また教会全体としても愛を特徴づけるものとして成長していきましょう。

1) 愛とは犠牲的で神様から与えられるもの 4b、8節

一つ目の要素として見て取れるものは、愛は犠牲的で神様から与えられるものだということです。もう一度4節に戻って、後半部分をよく見てください。「すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛のことを聞いたからです」と記されていました。パウロはコロサイの兄弟姉妹が抱いていた愛について聞いたのだと口にしていました。ここで言っている「愛」とはいったいどんなものだったのでしょうか？皆さんに覚えていてほしいことは、この「愛」と訳されていることばには、もともとは“アガペー”というギリシャ語が用いられているということです。このアガペーの愛というのは、ほかにも愛と訳することができるギリシャ語があるのですけれども、そういったものとは異なるものでした。例えばギリシャ語の中で「愛」と訳することができるものの中に、夫婦間における肉体的、性的な愛を意味するエロスであったり、感情的でだれかに対して強い興味を持ったり、愛情を抱くことを意味するフィレオといったことばがありますが、アガペーの愛というものはそういったものと異なるものでした。ではいったい何が違うのかというと、アガペーの愛は単に感情で終わるものではなかったということです。アガペーということばが使われる時、単に感情で終わるのではなくて、みずから進んでだれかの益のために自分自身をささげる、そんな犠牲的な愛のことを表していました。感情がないわけではありません。でもだれかを心から愛するからこそ、その愛は感情でとどまるのではなくて、それを超えた犠牲的な行動を伴って、相手に喜んで仕えようとするわけです。そしてコロサイの兄弟姉妹たちというのは、そんなアガペーの愛で愛し合っていました。彼らはそんな愛をすべての聖徒に対して抱いていたということです。互いに犠牲を払って、彼らは仕え合っていたのです。

でも彼らの愛というのは、それだけでもありませんでした。続けて読んでいくと、7-8節のところに「:7 これはあなたがたが私たちと同じもべである愛するエパfrasから学んだとおりのもので、彼は私たちに代わって仕えている忠実な、キリストの仕え人であって、:8 私たちに、御霊によるあなたがたの愛を知らせてくれました。」と書いていました。これまでも触れたように、エパfrasはパウロのところにコロサイの兄弟姉妹の現状を伝えに来たのです。そして、その報告の中で、コロサイの教会の愛について彼はパウロに言ったのですけれども、何と書いていました？8節に愛に関してある要素が含まれていました。それは「御霊によるあなたがたの愛」でした。彼らの愛は、単なる愛ではなく御霊による愛でした。このことばを簡潔に言いかえるのであれば、彼らが持っていた犠牲的な愛というのは、自分たちのうちから来たものではなくて、御霊である神様から与えられたものだったということです。コロサイの信仰者たちが持っていた愛は、彼らが生まれながらに持っていた感情でも、才能でも、能力でもありませんでした。

た。その愛は、彼らが救われ、新しく生まれたとき、ほかのだれでもない神様によって与えられたものだったというのです。

そして、これは私たちにとっても非常に重要なことになるのです。これまでも私たち見てきたように、聖書は繰り返し何度も私たちが互いに愛し合うということを教えていました。信仰者ひとりひとりが犠牲を払って、みずから進んでほかの人に仕えていくというのを責任として求めていたのです。もちろんそのことを私たちはこれまでも何度も何度も教えられているからこそ、知識としては知っています。兄弟姉妹を愛することが大切なのだと私たちもわかっているからこそ、それを実践しようともします。でも私たちは時に愛を示しやすい人、愛を示すのに難しさを覚えるような人、また場面に出くわすことはないでしょうか？それぞれの歩みには、この人には喜んで自分は愛を示せるという存在がいるかもしれません。この人は自分には何の問題ももたらさないし、何も頭を悩ませるようなことも起こさないし、いつも誠実で信頼できるし、この人のためだったら自分は進んで愛を示しましょうと。でもその逆はどうでしょう？もしある人がいつも何らかの形で問題を引き起こして、横柄でプライドにあふれていて、事あるごとに自分を傷つけて悲しませたり、また不誠実だったとしたら、果たしてそんな人にもみずから進んで愛を示そうとするでしょうか？そんな人には愛を示すのが難しく、愛ではなくて怒りや不満をいつも示しているかもしれません。また、もしかすれば、そんな人とはできる限り距離をとって、関わらないようにしているかもしれません。もし愛を実践するかどうかの選択肢が私たちに与えられていたとすれば、私たちが持っている性質は、それが難しい人には愛を示そうとしないという選択にすぐに傾いてしまいます。

こうやって考えてみると、私たちには、愛を示すことに難しさを覚えることがあります。そして何よりも私たちが私たちのうちを見るのであれば、本来そんな犠牲的で、みずから進んで示す愛というものが、私たちのうちには存在していないということを目の当たりにするのです。そんな愛を持っていない私たちに、果たして互いの間でキリストの愛を実践することができるのでしょうか？もしこの互いに愛し合うための愛というものが、私たち自身の力や意思に求められるのであれば、それは絶対にできませんでした。それ以上に、生まれながらに罪の中に死んでいるような者には、そんな愛を実践することは不可能でした。生まれながらの人間は、神様が求めているこの愛を実践することは絶対にできないのです。しかし、もし私たちがキリストの福音を信じて、愛である神様を知ったのであれば、もし私たちが恵みによって救われ、愛である神様から新しく生まれたのであれば、私たちはその神様の愛を互いの間で生きていくことができる者へと変えられたのです。

ヨハネは、この真理を自身の手紙の中で繰り返し教えていました。こんなふうに書いています。Iヨハネ4：7に「:7 愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。」と。また、その続き10-11節にも「:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。:11 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。」と書いていました。そして最後にもう一つIヨハネ4：19に「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」とありました。もし私たちが兄弟姉妹のだれかを愛することに難しさを覚えるのであれば、自分にはこの人を愛することは到底できないと感じるのであれば、まさにそのとおりです。私たちにはできません。でも、私たちの神様はそれをなされるお方でした。私たちはこんなふうにも考えることもあるかもしれません。神様、あなたは私をごらんになる時は笑顔でいてくださっていて、あの兄弟をごらんになる時は怒っておられるはず。なぜならあの人はこんなにもひどいことを私にしたからです。自分にこんなひどいことをしたあの人のことを、あなたも同じように腹を立てているはず。私たちはこうやって、時に自分の基準を神様に当てはめようとします。でも、覚えていなければいけないことは、神様はご自身の子どもたちのことをみな同じように愛されて

いるということです。私たちは兄弟姉妹を愛することに難しさを覚えるかもしれませんが、でも神様はそうではないのです。考えてみてください。神様はご自分のもとに心碎かれて悔い改めと信仰を持ってやって来る罪人に、その大きな愛を持ったあわれみでもって、救いを与えてくださいました。そこに例外はありませんでした。また悲しいことに、救われた後も罪の性質を持っている以上、数え切れないほどの過ちを、罪を犯してしまうこともあります。そんな愚か者にもかかわらず、そんな罪深い者にもかかわらず、神様は変わらず愛を示してくださるのです。もちろん聖い神様は罪をよしとはされません。罪を犯せば懲らしめを与えることもあります。でも、その懲らしめでさえ、ご自分の子どもたちが聖くなっていくために、さらに成長することを願う父親のような愛のゆえでした。

ヘブル 12 : 6に「主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」と書いてありました。私たちは自分自身の力で、互いに愛し合いなさいという命令に従っていくことはできません。でも、もし私たちがこんな愛である神様の愛を本当に知っているのであれば、それを本当に自分のものとして受けたのであれば、この愛である神様から新しく生まれたのであれば、私たちはその愛でもってお互いに愛を示していくことができるのです。どうしてキリストを本当に信じている者が互いに愛し合うのか？それは愛である神様から生まれているからでした。愛を本当に知っているのであれば、それを互いの間でも必然的に示そうとするのです。私たちに大切なことは、いつも私たちに対してこんな犠牲的な愛を示してくださったお方に根差し続けることです。どんなふうに愛されたのか、どんな犠牲を払ってくださったのか、その方を覚えて、そしてこの方の助けを祈り求めながら歩んでいくことです。愛とは犠牲的で神様から与えられるもの、それが一つ目の要素でした。

2) 愛とは分け隔てのないもの 4 b 節

そしてもう一つの要素は、愛は分け隔てのないものだということです。何度も見たように、4節でパウロは、コロサイの教会は「すべての聖徒」たちに対して愛を抱いていたのだと言っていました。「すべて」というのはもちろんすべて、一部ではないということです。自分たちと気の合う人たちだけではないということです。自分に愛を示してくれる人たちだけでもないということです。彼らは自分たちと同じように、主を愛している兄弟姉妹のことを例外なく愛していたのです。そしてそれは、異邦人であろうが、ユダヤ人であろうが関係はありませんでした。彼らの愛は分け隔てのない、すべてに対するものだったと言うのです。もちろん私たちは、このことばを聞いて単純にすごいと思うかもしれませんが、逆にすべての聖徒たちということばを聞いて、自分には難しいと考えているかもしれません。でも覚えてほしいことは、コロサイの教会にとってもすべてのもの、人種や民族や身分などの壁を越えて愛を実践するということは決して容易なものではなかったということです。彼らにとっても、すべての人に対して愛を実践するというのはチャレンジでもありました。なぜかという、この時代、例えばユダヤ人と異邦人との関係性を考えただけでも、そこには大きな隔たりが存在していました。彼らは互いにねたみ合ったり、その間には争いや分裂が絶えることがなかったのです。私たちが想像するよりも、はるかにその二つの者たちの間には大きな隔たりがありました。

いったいどうしてそんな隔たりが彼らの間に存在していたのでしょうか？その答えに関しては、私たちが歴史を振り返ってみれば、よく読み取ることができるのです。旧約聖書を見ていく時に、神様は最初、ご自分の特別な民としてユダヤ人を選ばれていました。イスラエルの父であったアブラハムにもこんな約束を与えていました。創世記 12 : 3 を見てみると、「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」と書いていました。神様はこうしてアブラハムとその子孫を大いに祝福すると約束されていました。そしてそれと同時に、神様は彼らを通して、ご自分の恵みをこの世界に広めようとされていたのです。神様の民として特別に選ばれたユダヤ人たちは、神様の恵みをほかの人々へと届ける器としての重大な働きをも担っていました。それが神様のご計画でした。しかし、残念ながら彼らはその本来の責任を果たそうとはしなかったのです。

す。彼らは自分たち以外の人々、異邦人に対して神様の恵みを示そうとしないばかりか、自分たちが神様に選ばれた特別な存在なのだとおごり高ぶって、そうでない人たちを忌み嫌っていました。これが一般的なユダヤ人が異邦人に対して持っていた態度でした。

そしてこんな態度というのは、社会の中だけではありません。教会の中にもあったのです。聖書の中でもいろいろな場面で見取することができます。例えばあのペテロもそうでした。彼も最初は異邦人に対して軽蔑の念を抱いていたのです。彼自身も汚れた異邦人と一緒に時間を過ごすことは正しくないという考えを持っていました。だから神様は使徒10章に出てくるように、動物の幻を見せて、「神がきよめた物を、きよくない」（使徒10：15）と言っはいけないということを、彼に教える必要がありました。ペテロもそんな状態でした。その後、ペテロはカイザリヤに住んでいた異邦人のコルネリオのもとを訪れ、彼とその親族に対して大胆に福音を語った結果、彼らのもとに聖霊が下ることになりました。その時のことばが使徒10：34-36節にこう書いています。よく聞いてみてください。ペテロはこう言うのです。「：34 そこでペテロは、口を開いてこう言った。「これで私は、はっきりわかりました。神はかたよったことをなさらず、：35 どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行う人なら、神に受け入れられるのです。：36 神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝え、イスラエルの子孫にみことばをお送りになりました。このイエス・キリストはすべての人の主です。」と。ペテロはキリストがすべての人の主であることがこの時はっきりとわかりました。ペテロは偏っていたのです。そしてペテロは十二使徒のひとりでした。十二使徒のひとりであるペテロがこんな様子であれば、ほかの信仰者たちがどうだったかは容易に想像できます。案の定、彼らも間違っった考えを持っていました。

ペテロを通して、異邦人に救いが伝えられたという知らせを耳にしたユダヤ人の兄弟たちは、そのことをよく思わず、間違っった態度をとるのです。その様子が先ほどの続き、11：1-3に「：1 さて、使徒たちやユダヤにいる兄弟たちは、異邦人たちも神のみことばを受け入れた、ということを目にした。：2 そこで、ペテロがエルサレムに上ったとき、割礼を受けた者たちは、彼を非難して、：3 「あなたは割礼のない人々のところに行って、彼らといっしょに食事をした」と言った。」と書いていました。彼らもペテロと同じでした。神様の救いは異邦人のものではない、異邦人は汚れている。そんなこれまでの習慣にならった考え方を持っていたのです。だからペテロはそんな憤っている彼らに対して、続く11：17でこんなことばを述べていました。「私たちが主イエス・キリストを信じたとき、神が私たちに下さったのと同じ賜物を、彼らにもお授けになったのなら、どうして私などが神のなさを妨げることができましょう。」と。そのことばを聞いた彼らはこう答えるのです。「それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ」と。こうして彼らも神様のみわざをほめたたえたのです。

それだけではありません。奴隷であったり、身分の違いであったり、いろいろな違いがこの教会にも存在していました。人はみんな信仰によって、恵みによって救われるという教えを確かに聞いて、それを心から受け入れていたのです。でも、これまでの慣習や教えが妨げとなって、教会には不一致や争いが生まれていました。キリストを信じたすべての者たちが一致するという、一つになるということには大きな難しさが伴うのです。でもそんな中で、コロサイの兄弟姉妹たちはすべての聖徒に対して愛を抱いていたと言うのです。彼らは喜んで犠牲を払って、自分たちが神様から受けたその愛でもって互いの中で愛を実践しようとしていたというのです。

コロサイの教会のその愛というものをエパfrasから聞かされて、パウロは大いに喜んだでしょう。教会の中には確かにいろいろな問題はありました。それでも間違いなく彼らが真に救われている者たちであって、神様に喜ばれる者として歩んでいることを確信して、パウロは神様に感謝を捧げていたのです。それがコロサイの教会に見られた神様に喜ばれる教会としての特徴でした。彼らはすべての聖徒に対する愛を思っていたのです。では、果たして私たちは、この教会に見られたような分け隔てのない愛を持っているのでしょうか？この点において、私たちはどんなふう成長し続けているのでしょうか？たと

えどんな人であろうとも、犠牲を払って、みずから進んで喜んで仕えようとしているのでしょうか？それとも頑なに自分と合わないような、気に入らない人に対しては愛を示そうとしていないのでしょうか？よく考えてみてください。私たちがみことばで見ているこの愛というのは、この世が考えているようなものとは全く異なるものです。世の中の多くの人たちは、もしかしたら何かしらの問題や争いが生じたら、その関係をまず断ち切ろうとするかもしれません。自分のことを理解してくれる人は大丈夫、でも自分のことを傷つけて悲しませるような人は、自分の喜びや平安を奪ってしまうような人は自分には要りませんと。そう言って自分の中から追い出そうとするかもしれません。できるだけ関わらないようにしましょうとするかもしれません。そうやって愛を示せる人にもみ愛を示そうとします。

でもこれは、キリストが私たちに与えてくださった、私たちに示してくださった愛では全くありませんでした。あの十字架が示してくださった、与えてくださったあわれみや赦しの姿でもありませんでした。なぜならもしイエス様がそんな形で私たちのことを愛されたとしたら、私たちはいったいどうなるのでしょうか？キリストが私たちひとりひとりのうちにある弱さやプライド、日々犯す罪をごらんになって、どうしてあなたは私の忌み嫌うことを何回もするのですか、してはいけないということをおあなたはわかっていますよね？そんなあなたのことなど、私はもう知りません、あなたとはいっさいの関係を持ってませんと、もし言われたとしたらどうするでしょう？キリストが、あなたは全然変わっていません、だからあなたが態度を改めるまで、私に対する愛を十二分に証明するまで私はあなたを決して赦しませんと言われたとしたらどうでしょう？そうなれば、私たちには絶望しかありませんでした。私たちが神様の完璧な基準を満たすことができるはずはないのです。

でも感謝なことに、主の愛や赦しというものはそのようなものではありませんでした。イエス様は、私たちがまだ罪人であったときに、みずから進んで十字架に架かってくださいました。ローマ5：8にははっきりと記されていました。「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」と。これは私たちが何の問題もない、正しいよい行いをする人だったからではありませんでした。何かそれに値するから、それを与えてくださったのでもありませんでした。私たちは例外なく、みな生まれながらに罪に汚れた存在で、神様からのさばきのみが値する存在だったのです。しかし、私たちが神様の前を逆らって歩む罪人であるときに、敵であるときに、ほかのだれでもないこの方が一方的に恵みを示してくださり、手を差し伸べてくださったのです。私たちが神様を愛したからではなくて、神様がまず私たちのことを愛してくださいました。本来であれば、罪ゆえに滅ぼされて当然の私たちを、この方が大きな犠牲を払ってみずから赦しを与えてくださったのです。

だからこそ、もしまだこの救い主の愛を知らない方がおられるのであれば、どうかきょうこの方を知って帰ってください。私やあなたのようなそんな罪人のためにみずから十字架にかかって、ご自分のいのちをささげてくださいましたあわれみ深い方の、そのあわれみを求めてください。このイエス・キリストのうちにのみ救いがあります。そんな偉大な方の前に、自分の罪を認めて悔い改め、そしてこの方を自分の救い主として、主として信じる歩みを始めてください。この方のために生きる歩みを始めてください。そこにこそ本当の喜びがあります。

また、この救い主をもうすでに信じて従っておられるという兄弟姉妹の皆さん。こんな神様の愛を、こんなキリストの姿を、私たちが本当に自分のこととして知って、自分はそれを信じている、自分はそれを受け入れたのだと言うのであれば、いったいどんな愛を私たちは互いの間で実践しようとするのでしょうか？確かに私たちは、時に愛を実践することに難しさを覚えることがあります。同じ主を愛する兄弟姉妹に対して、犠牲を払って仕えられないと思ってしまうような場面もあるかもしれません。でも、そんなときこそ、私たちの主は、まずただご自分の恵みによって私やあなたに到底値しない愛を示してくださったということを思い出し続けることです。そして、その愛をあなたが受けたように、あなたの

隣にいるその兄弟姉妹に対しても同じ愛は示されたのです。私たちは同じ愛の神様によって救われて、同じ愛の神様によって新しく生まれました。いろいろな違いは確かにあります。でも私たちは同じ福音を通して、同じキリスト・イエスによって一つとされたのです。同じ主を愛する者として、今を生かされているのです。同じ愛を知っている者として、私たちは今を生きているのです。だからこそ、私たちはその愛でもって互いに愛し合っていくことです。主が私たちに示してくださったそんな犠牲的な愛でもって、私たちは互いに仕え合っていくことです。

コロサイの兄弟姉妹たちは、まさにそのように歩んでいました。彼らは確かに救われた者として、キリスト・イエスに対する信仰においても、またすべての聖徒に対する愛においても神様に喜ばれる教会としてともに生きていました。そして、そんな明らかな姿をパウロは耳にして、神様は何てすごいことをなされたのだと、神様に感謝をささげていたのです。では、私たちはどうでしょう？この点において、私たちひとりひとは、ますます成長していかなければいけません。ともにキリストの福音を生きる教会として、すべての聖徒に対する愛においても特徴づけられるような、そんな群れを目指していきましょう。